

遮断して、各映畫が一定の位置に來た時にのみ、幕の上に映し出されるやうにしたものである。

活動寫眞のフィルムに寫眞をうつすのは、普通の寫眞の種板と同じ藥液を塗つて撮影する。その大きさは一定してゐて幅は三十五ミリメートル、その上の映畫の一つ／＼は幅二十五ミリメートル、高さは十九ミリメートルである。一尺のフィルムには十六ばかりの映畫が入つてゐるが、これを機械にかけると、一秒間に十五乃至二十の映畫が變るから、二百尺の卷寫眞も映し切つて了ふわけである。フィルムの兩側には一列の穴が明いて居る。これはフィルムを送り動かすのに最も大切なものである。今フィルムを機械にかけたとするとそれに裝置されてあるギザ／＼が、この穴にさゝつて一つ一つ正確に次から次へと燈光の前に出されるのである。

活動寫眞を見て居ると、非常に早く速力で走つて行く車の輪が少しも回轉してゐなかつたり、又は逆に廻轉して見えるやうなことがある。活動寫眞の撮影は色々な事情から、一時間に十五から二十までの映畫を作るに限られてゐて、それ以上は實際不可能であるが、假りに車が盛んに廻つてゐるとすると、若しその車の速度の工合で卷寫眞が感光する度に毎に

車の輪の骨の位置が常に同じやうな、又は逆になつて行くやうになると、このフィルムを映寫する時に車が前進して行くにも拘らず少しも廻らなかつたり、又は逆に廻るやうな奇怪な現象を生ずるのである。

ロボット ロボットは人造人間、機械人間、自動人形など、譯される。有線及び無線の電氣作用の機械、其他種々精巧複雑な機械を体内に裝置し、恰も自然人間の如き働きをする機械人間のことである。現在のところまだ試験時代であるが、將來は實用の域に達するであらうと考へられてゐる。科學者の説によれば、將來地球上には二種類の人間が存在するやうになる。その一つは人間によつて製造されたロボットであり、今一つは生理學的に誕生した我々自然人間である。而してその頃の自然人間は、専ら智能的仕事にのみ活動し、骨の折れる所謂筋肉勞働の一切は、ロボットがやつてくれるであらうと言ふのである。

# 第廿八編 運動競技知識

## 第一章 角力(相撲)

### 第一節 角力の起源

神傳と角力 舊約全書の創世記第三十二章に「しかしてヤコブ一人遣りしが人ありて夜明くるまでこれと角力す……その人かれにいふ、汝の名は重ねてヤコブと唱ふべからず、イスラエルと唱ふべし、そは汝神と人とに力を争ひて勝ちたればなり」とある。その人といふのはイエス・キリストであり、これで見ると角力の起源は聖書である。處が東における佛敎徒の聖書法華經を見ると今から三千年の昔、釋迦如來の實弟白飯王と、提婆達多摩那大臣の間に猛烈な角力合戦の行はれたことが記載されてゐる。東西揆を一にして神佛共に角力がお好きであつたことは不思議であるが、これは我國とて同じこととて、高天原時代の陸軍大臣、建御雷神が出雲征伐の折、弓矢に訴へる危険な戦争を避け、大國主命の御次男にして出雲側の代表建御名方神と伊那佐において、矢張りこの角力合

第廿八編 運動競技知識 第一章 角力(相撲)



横綱土俵入り

戦により勝敗を決した。その時の戦況を古事記には「建御名方神、千引石を末端に擧げて來て、誰ぞ、我と力闘べせんといふ、建御雷神その御手を取らしむれば即ち立氷に取りなして、また劔双に取りなして、かれ罷れて退き居り、こゝに建御名方神の手を取らむこと乞ひかへして取れば、若輩を取るがごと、滴みひしぎて投げ放ちたまへば建御名方神は科野の國へ逃げ去りにき」と記してある。

裁判の一形式 處が昔から我國には、角力は神の審判で、正しい者が必ず勝つといふ信念が流行し、角力が裁判の一形式であつた時代がある。例へば源平盛衰記によれば、人皇五十五代文德帝の御代惟高、惟仁兩親王側近の間に勢力争ひがあつて容易に解決しなかつた。そのため最後の



決を禁裡南苑で行はれる天覽の角力節會によることとし、相方から一名つゞの代表選手を出した。惟高親王側から選ばれたのが外祖佐兵衛佐名虎、惟仁親王側から選ばれたのが能雄少將、貴顯雲の如く居並ぶ前で、この勝負はどうなつたかと言ふと、源平盛衰記に「名虎は能雄が腕頸引寄せ、高く差上げて曳々聲出して投げたるに……能雄は一丈餘り天空でクルリと宙返りして見事に立ちたりけり」とある如く、物凄く立合で火蓋を切つたのであるが、名虎關は身の丈七尺、力量六十人力の怪物、それに反して能雄關は白哲の美青年で能雄關の飛付く状は「松の太木に藤つるの纏ふが如く」で、一時間ほどもみ合ふ中、能雄關の旗色が極めて悪くなつた。然し美青年に勝たせたいのは誰しもの人情である。一同冷々氣をもんで最早これまでと思はれたとき、惟仁親王これを見給ひ、延曆寺の僧都惠亮師の所へ急使を派遣された。どうしても神佛の加護で能雄關を勝たせるといふ強談判である。これには惠亮僧都も窮つた。親王には恩義がある。然かし倒れた家を起すことは不可能事に屬する。而もなほ僧都はそれを前代未聞の方法で解決した。即ち僧都は不覺を我山に残さば命生きて何かせんと、刀を自分の頭へ突きさし、ゑぐり取つた脳味噌

の香を焚いて「歸命頂禮大聖大威徳明王」と汗をダクダク血をタラ／＼、それこそ凄惨な命がけの法悦三昧に祈禱を續けた。すると不思議や神力本尊に通じ、「本尊行者に申しければ水牛の置物、突然爐壇を廻る事三度、聲をあげてぞ吠えたりける」と源平盛衰記の作者を感激せしめた所の奇蹟が起り、奇蹟が起るや土俵上に仁王様の如く突つ立つた名虎關は急に力を失つて、白哲の美青年力士能雄關のため大地へたゞきつけられ、血を吐いて死んだとある。その眞偽のほどは勿論確かでないが、角力は其の後、我國の武威を示す觀兵式代りに使はれたこともあり、神功皇后の朝鮮征伐後百濟の使節が來朝するやうになるや、何時もこの角力の觀兵式で使節の度膽を抜いたのである。

### 第二節 天覽角力節會

人皇第四十五代聖武天皇の御代に角力節會が設けられるまでには、彼の有名な野見宿禰と當麻村の住人麻連の一戦がある。この一戦こそ我國の正史に残る最初の取組で、この取組のため野見宿禰は後世、角力の神様とあがめられた程ではあるが、その時の状態を日本書紀によると「二人相立ち、足を擧げて相蹴

る、則ち當麻麻連の脇骨を蹴折る、亦その腰を踏折る。而してこれを殺す」といふので、つまりは角力といふよりは馬の蹴り合ひであつたのである。従つて興味は寧ろ聖武天皇の神龜三年から四百年、高倉天皇の御代まで續いた天覽の角力節會にある譯で、この節會においてこそ我國の角力道も、絢爛たる花を開いたのである。

處がこの節會も最初は、單に野見宿禰を記念する大宮人の娛樂に過ぎなかつたのであるが、清和天皇の御代、この節會の所轄が式部省から兵部省へ移つてから、果然最も重要な兵事上の儀式となり、天正天皇の御代には角力拔出司といふ専門の官職が設けられ、更に醍醐天皇の御代には節會不参加者を檢擧投獄する法律まで出来たほどである。

この天覽角力においては、出場選手は左右二十名づゝで、初めの中は近衛府の衛士又は防人に限られてゐたが、後全國から選ばれて、七月七日、紫宸殿の前庭で豪華な火蓋を切つたのであるが、節會自身は次の五段階に分れてゐた。一内取、一御前内取、一召合、一拔手及追手、一追角力。この中内取とは節會の數日前、左右の近衛府に設けられた角力所で行ふ豫選會である。御前内取とは節會の二日前、宮廷で行はれる第二豫選で

ある。そしてこの二つの豫選を通過した左右二十名宛の力士が節會當日の召合に臨み、こゝを晴れと天覽の角力を勤めるのであるが、これは飽くまでも個人競技でなくて團體競技である。即ち勝星の多い方に優勝旗を興へられ、苦情の出た角力には、天判といつて天皇御親から御裁決を興へ給ふたほどで、出場力士は最初に占手、その次が垂髪、總角といふ順で、四番目に普通の力士人が、最後には大關に當る得手が出て終りとなる。拔手及び追手とは、節會の翌日行はれる選抜力士の決勝戦で、追角力とはその後で衛府の舍人達が、餘興として行ふ勝負であつた。

### 第三節 武家相撲の勃興

武藝十八般の一 この豪華な節會角力も、武家政治の勃興と共に滅んで武家角力に代つた。賴朝以下信長・秀吉・家康と打續く政界の巨頭達は、宮廷文化の一切を輕蔑して拒絶したがたゞ一つ角力だけを繼承して武藝十八般の一に加へ、賴朝などは専門の角力奉行を置いたほどである。従つてこの時代には曾我物語で有名な、河津三郎と股野五郎の一戦を初め、朝比奈、島山、三浦、和田といった横綱級達が顔を並べ、武家



角力の黄金時代を形成したが、これが徳川時代に入つて、町人階級の勃興となるや、忽ち三轉して金儲本位の現在の勸進角力となつたのである。

土俵の由来 然し現在の角力も、風雅な節會角力に端を發してゐるだけに、優雅な大宮人の遺風を可なり残してゐる。例へばあの土俵であるが、これは天正年間から慶長年間にかけて出来上つたもので、それまでは力士連の造る圓陣の中で勝負を争つたものである。所がこの土俵なるものは、昔の禁裡における四阿を形取つたもので、四隅に立つた柱もそれ／＼宮廷の四門、即ち青龍、白虎、朱雀、玄武の各門を表象し、青色に巻いた柱は、春にして東、白色に巻いた柱は秋にして西、赤色に巻いた柱は夏にして南、黒に巻いた柱は冬にして北といふ意味が含まれられ、外側の四角な土俵は卅六俵、内側の丸い土俵は十六俵、左右に二俵宛並んだ俵は陰陽を現し、呵咄の二字を表徴する二字口を造つてゐる。力水、力紙、撒鹽等もすべて、天覧の際に取亂した姿を防ぐため、節會角力で行はれた身だしなみの遺風である。

### 第四節 女角力

「曲淵越前守を見て、女の角力ちやといふ、その心は云々」といふ一節が延享二年刊行の流行記にある所を見ると、その頃既に兩國において、女角力の興行が行はれたことが知られる。大阪ではそれより少し遅れて「力業を習ひし女郎數多抱へて、大阪難波新地で女角力の興行をなす、中にも板額といふ女關取は三十日五十兩を先取りする逸物にて云々」といふ文獻が残つてゐるから、明和六年頃から始まつたものと考へられる。然かしこの一節は「世間化物氣質」といふ本にあるので、百年の昔も今と同様、女角力を化け物扱にしてゐたのである。然かし當時は何んといつても、絢爛と咲き誇る町人文花の世の中で、伊達と粹と狭斜が、金にあかせて幅を利かせてゐた時代である。そして吉原の花魁や羽織藝者を對照とする、低調な四疊半趣味にあいた江戸人が、戸外へ飛び出して求めたより強い刺戟がこの女角力である。従つてそれは前にもいつた如く、當時の幕府が女子の體位低下を憂ふるのあまり、スポーツによる斯道改善を企圖したのでないことは勿論である。それは正に江戸人が金にあかして求める獵奇趣味として新らしく企圖した女人征服であつた。

と羊といつたゲテモノ趣味も加へられ、更に進んでは神聖なるべき土俵で、日本式尻振りダンスを公開せしめたので、當時の流行唄にも「姿なまめく手踊や、晝と夜との四十八手、差し手引く手も鮮かに」などの一節が残つて居る。それ程であるから寛政年間に、公開禁止を食つたのは當然の話だが、文政九年には再び復活し、復活するや直ちに老中田沼意知がこれを殿中へ移し、天鷹絨の布圍の上で、奥女中同士の角力大會を開催し、將軍家にお目にかけて長閑な大奥の一日を賑はしたといふ。其後は女角力も幕末まで續き、明治五年に一度禁止され、日露戰爭直後再び復活したが、その時は最早や男と女、女と羊などの取組は禁止され、今日の如く肌襦袢にズロースといふ無格好な女同士の取組む角力に變つてきた。

- 一、高玉女相撲本部(本部所在地、酒田市)
- 二、高玉女相撲第二部(本部所在地、酒田市)
- 三、石山女相撲部(本部所在地、山形市)

四、北州俱樂部女相撲(本部所在地、秋田市)  
凶作の東北から女角力の生れたのも皮肉であるが、それは何の不思議もない。女角力は何れも前借金に縛られる、白き奴隷に過ぎないのである。この四部は年中旅稼ぎを働き、現在も高玉第一部と二部が合併して山形縣下、石山興行部は朝鮮、北州興行部は四國といふ風に、内地はおろか遠く外國にまで遠征するほどの文字通りの旅鳥である。「風の吹きよでおいらも變る、仁義双六丁半かけて……渡るやくざの頼りなさ」と唄の文句をその通りの忙しい身の上である。

### 第五節 日本相撲協會

協會の成立 明治四十二年回向院内に國技館が創設されたが、大正七年火災のため焼失したので、二年の後更に建設せられ昭和二年大阪大相撲が東京に合併し、日本大相撲協會と稱し全國唯一の相撲團體となり現今に及んで居る。  
力士の組織 力士は年寄の門弟に屬して部屋と稱し、舊來の系統を追つて東西に分れ、力士の階級を横綱・大關・關脇・小结に分ち、これを役力士と稱してゐる。  
前頭は東西各二十人前後あり、これを幕内力士といひ、以



下二段目、三段目、序の二段、序の口、本中、前相撲等の階級がある。二段目は東西各五十人位あり、番附の二段目であるからこの稱あり、この中の上位にあるものを十兩力士といふ。三段目は番附の三段目に在る角力である。序の二段は番



相撲

附の四段目にある者、序の口は最下段の五段目にある者、本中はまだ番附に乗らず、力士の仲間にも入らぬ者、前相撲は新弟子のことで、前角力に勝越せば本中となるのである。相撲四十八手 相撲の手は四十八手に限らず、手捌八十二手、手碎八十二手などを加へる時は百手二百手ともなるが、これを四十八手といふのは、その代表的の手をいつたものである。

る。然しこれも時代と行司の流儀とによつて相違があり、現今一般的に用ひられてゐる極り手は左の如くである。

- |      |     |       |       |      |     |      |      |      |      |       |
|------|-----|-------|-------|------|-----|------|------|------|------|-------|
| 一本背負 | 寄切  | 内掛    | 足取    | 頭捻   | 徳利投 | 掛投   | 合掌捻  | 送出   | 丁斧掛  | 突     |
| 逆捻   | 泉川  | 捲落    | 切返    | 小手投  | 丁木反 | 吊出   | 外無双  | 上手出投 | 押出   | 四肢の張身 |
| 腰投   | 掬投  | 上手投   | 逆とつたり | 引掛   | 擲反  | とつたり | 上手槽投 | 鶴折   | 河津掛  | 右四つ   |
| 鴨の入首 | 三方攻 | 鉦(片門) | 突落    | 引落   | 捨身  | 蹴手繰  | 門    | 首投   | 外掛   | 二丁投   |
|      |     |       | 網打    | はたき込 | 肩透  | 素首落  | 下手投  | 浴倒   | 下手出投 |       |
|      |     |       | 首槽    |      |     |      |      |      |      |       |

### 第二章 柔道

#### 第一節 柔術の起源と流派

柔道は昔の柔術のことで、やはら又はやはら捕りとも稱し素手で組合ひ人を捕へる拳法術である。

#### 第二節 講道館柔道の由來と型

柔道の型 柔術には古來多くの流派があるが、この技術においては大同小異で、維新後は一時衰へるに至つたが、嘉納治五郎が起つて諸流の長所を採つて講道館柔道を唱導してからは、武術としてよりも寧ろ、日本精神に立脚する體育として大いに世に行はれるに至つた。

投負背	刈外小	刈外大	車膝
投巴	腰大	落横	足込釣支

めるには道場に於て形を演じ、亂取を行ひ、勝負の原理を探究する。

正保年間明の歸化人陳元寶なる者が、江戸においてその門弟に教へたのが起源で、當時福野七郎右衛門、三浦興次右衛門、藏貝次郎左衛門等も彼に學び、技術の蘊奥を究めた。その後關口氏心が現はれるに及び、新心流の法を傳へて遂に一家を爲し護身の妙を得て盛名を傳へられるに至つたが、當時からこの術は諸藝の親として盛んに行はれることとなり、従つて多くの名手を輩出せしめた。

- これより先天文年間竹田中務大輔が捕縛の術即ち小具足に長じ、早くより竹田流を起したが、これ亦柔術の一種である。柔術の流派としては、日本教育史中の武術流祖譜に、次の如きものが記されて居る。
- |         |           |       |           |
|---------|-----------|-------|-----------|
| 三浦流     | 三浦興次右衛門義辰 | 福野流   | 福野七郎右衛門正勝 |
| 制剛流     | 水早長左衛門信正  | 梶原流   | 梶原源左衛門直景  |
| 關口流     | 關口八郎右衛門氏心 | 澁川流   | 澁川伴五郎     |
| 起倒流     | 寺田勘右衛門正重  | 扱心流   | 大山郡兵衛永保   |
| 瀧心流     | 神戸有隣齋     | 良移心當流 | 笠原四郎左衛門   |
| 日本本傳三浦流 | 高橋玄門齋展歴   |       |           |
| 爲勢自得天眞流 | 藤田麓憲貞     | 天神神陽流 |           |
| 爲我流     | 江畑木工右衛門滿眞 | 吉岡流   | 吉岡宮内左衛門   |







家光の三代に歴任し、それより代々將軍家の師範役となつた。また田宮對馬守長勝は居合術に妙を得て紀伊頼宜に仕へたが、その法は林崎甚助重信から出たものである。重信は早くより長柄刀の利を知つてこれを偏用したが、時人がこれを倣ふに至り居合術が生れたのである。 劍法も柔術と同じく明治維新後一時衰微したが、日清日露の兩役を経て再興し、現今では一般に劍道と稱し、體育上主要なる地位を占めて居る。

### 第二節 流派と範士

流派 劍道には古來多くの流派があるが、その中の重なるものを擧ぐれば次の如くである。

正天狗流	當流	王義明致流	戸田流	機迅流
無外流	天真正傳神通流	一刀流	神陰流	ト傳流
有馬流	天流	天道流	中條流	富田流
一放流	長谷川流	新陰流	疋田陰流	心貫流
柳生流	庄田流	小田流	神明無想東流	無明流
鐘捲流	一刀流	忠也流	小野流	梶流
天心獨名流	涼天豊清流	念流	東軍流	丹石流
自源流	貫心流	二刀流	二天流	二刀鐵人流
將監鞍馬流	吉岡流	愛洲陰流	願流	諏訪流
京流	源流	田宮流	淺山一傳流	一宮流

伯耆流	克己流	真心陰流	三和流	心形刀流
無澤流	無眼流	大東流	小田應變流	眞陰流
神通無念流	無形流	弘流	甲源一刀流	無滯盡心流
鈴木流	太平眞鏡流	天然現心流	神道一心流	無念流
鏡新明知流	玉影流	柳剛流		
範士	なほ現代における範士は左記の人々である。			
植田平太郎	高松	奥平鐵吉	前橋	
小澤愛次郎	東京	小川金之助	京都	
大島治喜太	東京	大藤勇次	佐賀	
川崎善三郎	高知	齋村五郎	東京	
島谷八十八	奈良	岡部正利	神戸	
高野佐三郎	埼玉	高橋越太郎	神戸	
高野茂儀	大連	富田圓	神戸	
中山博道	東京	中野宗助	京城	
納富五雄	長崎	榎山義賢	東京	
福富矢太郎	鹿兒島	持田盛二	東京	
渡邊學	神戸			

### 第四章 ラヂオ體操

#### 第一節 ラヂオ體操の原則

ラヂオ體操 ラヂオ體操は十一種類の運動を組合せ、十六呼間に一運動を終る事になつて居る。而して第一に於ては、第一、第四、第五及び第十運動を一呼間に一動作で行ひ、其他の運動は二呼間に一動作をなし、第二に於ては、各運動を一

呼間に一動作で行ふのである。

運動の速度は一分間に七十六呼を標準として居るが、臂及び脚の運動は幾分速く、其他の運動を幾分緩徐に行ふのを原



操體オヂラ

則とする。この體操を青壯年者が行ふ場合には、かなり活潑に、相當の氣合を以て行ふを本則とするが、其他の者にあり

ては特に運動の自由さ、圓滑さに主眼を置いて、餘り型に拘はらないやうに注意すべきである。 また第一と第二に分つたのは、初心者や虚弱者に對しては第一を、修練者及び強壯者に對しては第二を奨めたい意圖からである。尤も第二を行ふ場合にも、その準備運動として第一を最初に行ふことが適切である。特に虚弱な人以外の者は、體操を數回繰返し行ふべきであるが、同一體操を反復せんとする場合には、第九運動より第一運動に戻るが原則である。空腹のとき又は食事直後の場合は、何時行つても差支はないが、特に朝、夕、就寝前及び仕事の合間などが適當してゐる。

#### 第二節 ラヂオ體操の歌

- 一 躍る旭日の光を浴びて 屈よ伸せよ吾等が腕
  - 二 香る黒土玉露踏んで 跳躍れよ吾等が足
  - 三 清い朝霧涼風うけて 吸へよ出せよ吾等が大氣
- ラヂオは號ぶ一二三  
ラヂオは號ぶ一二三



四 吾等手足の打舞ふところ 強く明るく天地も躍る

ラチオは號ぶ一二三

### 第五章 乗馬

#### 第一節 馬術

馬術の沿革 我國の上古は馬術をさまで重んじなかつたと見え、古代史には馬に關する記事は殆んどなく、支那大陸との交通が始まるに及んで、この術が輸入せられたやうである。即ち天武天皇の十二年閏四月、詔して文武官に乘馬を練習せしめ、且つ騎兵を編制せしめ給ふたことが、歴史に現はれた馬術の最初である。

その後世と共に馬術も進歩し、文武天皇の朝には既に競馬の記事があり、これは最初朝廷の公事として行はれたものであるが、賀茂の競馬などもあつて、乗馬の術も當時から漸くその緒についたことが知られる。後世武士が興るに及び、必要上これを獎勵した結果技術も巧妙となつた。例へば源義經が三千の兵を従へ、共に馬に乗つて鴨越の絶壁を下つたが如き、佐々木盛綱が騎馬で藤戸の池上を渡つたが如き、歴史に顯著なる例である。

降つて室町時代の頃には、小笠原氏が世々その術を傳へたが、當時上總の人犬坪式部大輔慶秀入道道諱は馬術に達し、足利義滿及び義持に仕へ大坪流の祖となり、その門下から多くの妙手が輩出した。

其後後柏原天皇の時八條近江守房繁は、小笠原氏に學んで特に傑出し、遂に八條流を創始するに至つたが、爾來我國の馬術は大坪、八條の二流を標準とすることになつた。この外佐々木流、上田流、荒木流なども世に現はれてゐた。

近世の馬術 江戸時代の初期には我國の馬術も大に發達し、前記諸流の外に新富流、新八條流等が現はれたが、八代將軍吉宗の頃、和蘭人ケイゾルなる者が馬術に巧みなことを聞き、馬役高橋又右衛門を使者としてケイゾルを江戸に召し、齋藤三右衛門をして彼に就き學ばしめるに及び、西洋の馬術が初めて我國に傳へられることとなつた。

諸流派 馬術の流派には大坪流、佐々木流、上田流、荒木流、八條流、新富流、新八條流等がある。

#### 第二節 馬術の種類

馬術は現今では乗馬術と稱し、これを行ふ場所によつて馬場馬術、野外騎乗、障礙飛越等の種類があり、其應用として獵騎



馬術

長途騎乗等がある。馬場馬術は馬場内で馬の三種の歩度、即ち常歩、退歩、駈歩等を利用し、騎手の意のままに馬を動かすので、前肢、後肢旋回、輪乘、卷乘、半卷、急速旋回、肩を内にする運動、腰を内にする運動、横歩等の運動がある。馬術の高尙なものを高等馬術と名づけ、馬と騎手との一致を最も必要とし、パーサージユ、ビアッフエ其他の特殊の歩法を行ひ、又別に躍乗があつて、これにクルベット、カブリオール、クルーバット等がある。野外騎乗は山野を跋渉するもので障礙を飛び又走るのをいひ、その競走の場合を生地横斷競走と言つてゐる。障礙飛越は馬場内又は其他で、特に設けた障礙を飛越すものであり、馬術競技會では多くこれが行はれる。獵騎は大群を以て獸を驅り出し、馬でこれを追ふもので、長距離を早い速度で乗り續けるものを長途騎乗と稱してゐる。古代行はれた流鏝馬の如きも

騎射の作法の一つである。

#### 第三節 競馬

競馬の起因 競馬は馬を走らせながら、その速の勝負を争ふ技で、古昔はこれを「くらべうま」「こまくらべ」「きほひうま」「きそひうま」など稱したが、後世は字音に従ひ「けいば」と言ひ、また走馬、競走馬、競騎馬なども稱した。

文武天皇の大寶元年、勅して五位以上の者に、走馬を出さしめ給ふたことが續日本書紀に見えてゐる。支那に行はれた競渡に倣つたものと言はれるが、果して然るか否かは判明しない。中古以後は武家において盛んに行はれたが、鎌倉幕府創設以後朝廷が疲弊するに及びこの技も行はれなくなり、たゞ賀茂社のみで行つて賀茂競馬と稱せられた。

現今の競馬 現今の競馬は馬匹改良の目的で行はれ、勝馬に所定の賞金を與へて馬匹生産、馬匹改良の實效を擧ぐるを骨子としてゐる。競馬に際してはその賞金並に競馬開催の經費等に充てるため、一般に馬券を賣出し、観客に賭けることを許し、勝馬に賭けた者にはそれ／＼拂戻金を交附する。馬匹改良獎勵の最良の方法とせられるが、また投機心を咬る



等の弊を伴ふので、各國とも競馬法を制定してこれが防止に努めてゐる。我國の公認競馬は農林省監督の下に、十一箇所で行はれるが、全國にある東京府中・横濱根岸・千葉中山・京都淀・阪神鳴尾・九州小倉等著名である。又公認競馬以外に道府縣廳監督の下に行はれる地方競馬を、一に草競馬とも稱し、馬券面額を金一圓と定めてある。

### 第六章 射術

#### 第一節 弓術

沿革 上古は武藝中において最もこの術を重んじ、強弓大箭等を用ひた者が多い。歴史に見るに仁徳天皇の朝には野見宿禰が高麗から献じた鐵的を射通し、雄略天皇の朝には伊勢の朝日姫が、二重の甲を射通したなどの記事がある。降つて孝徳天皇の朝には、射術を以て朝廷の御恒例と定め給ひ、後また大射、騎射、賭射等の公事も起つたが、王朝時代武家の興起するに及び、必要上射術は益々發達して、源義家が甲三領を重ねて射貫いた如き、源爲朝が一箭を以て伊藤六の胸を貫き餘勢に、伊藤五を傷けたなどの、勇壯



術 弓

西洋砲術の傳はるまで依然として武藝の上位を占めてゐた。流派 射術には歩射、騎射、流鎗馬、笠懸、小笠懸、牛追物、犬追物、大的、草兜、圓物、賭弓などの種類あり、流派としては左記のものが世に現はれてゐる。  
小笠原派 小笠原信濃守貞宗 日置派 日置源正次  
吉田派 吉田上總介重賢 出雲派 吉田出雲守重高  
雲荷派 吉田六左衛門重勝 左近衛門派 吉田左近衛門業茂  
大藏派 吉田大藏義氏 印西派 吉田源八郎重氏

#### 第二節 射撃

射撃は銃、砲から彈丸を發射して目的物的の中せしめる技でその使用火器によつて拳銃射撃、小銃射撃、機關銃射撃、野山砲射撃、野戰重砲射撃、海岸砲射撃、艦砲射撃等に分れて居る。實彈を用ひるものを實彈射撃、然らざるものを空砲射撃といひ、射撃の練習にはまづ射撃進行演習を十分行ひ、其後狹窄射撃基本射撃を経て戰闘射撃に至るのである。基本射撃は射撃技能の基礎を確立して戰闘射撃を準備し、戰闘射撃は戰場に於て、必要の射撃技能の養成を主目的とする。戰闘射撃にそれぞれ各個戰闘射撃と部隊戰闘射撃とがあり、其他特別射撃、檢閲射撃、實驗射撃等があるが、是等はいづれも應用射撃である。

### 第七章 各種競技

#### 第一節 オリンピック大會

古代オリンピック 希臘文化の黄金時代といふべき二千七百

餘年の昔、古代オリンピックの祭典競技が、ゼウス神を祀るアルチスの聖林で行はれて以來、紀元三百九十四年まで十一世紀間に亘り、四年目毎に大會が開催され、青年希臘の精神作興と肉體強化のため偉大なる文化的貢獻をしたが、東羅馬皇帝テオドシウス一世の登場に及んで、その反動政策は遂に大會を廢止し、さしにも豪華を誇つた古代オリンピック競技も、敢なき破局を告げたのである。古代オリンピックにおける競技種目は競走、跳躍、角技、圓盤投、槍投、戰車競走などで、此外美術、文藝、音楽等の競演も行はれたが、勝者の名譽表彰には、聖樹橄欖の葉で作られた冠が與へられたといふことである。古代オリンピック競技は、右の如く希臘文明によつて組織化され、高度の發達を示したが、最近オリンピック文化の研究につれて、その淵源が寧ろ希臘文化以上に、古い亞細亞文化の中からスタートしてゐるといふ説が、漸次有力化されつゝあることは見逃せない。兎に角運動競技が希臘民族の睿智と情熱によつて培はれ、オリンピック競技への形式を組織化し、後世の近代オリンピック復活に對して、多大の素因を培養したものとはいへるのである。

近代オリンピック 古代オリンピック滅亡後、幾春秋を経て人



類の歴史は、間斷なく成長し中世紀以後におけるルネッサンス時代出現の影響は、新しき世界文化建設への前奏曲となり殊に十九世紀に於ける獨逸考古學者のオリンピヤ遺跡發掘は近代オリンピックに對する鋭い示唆を與へ、佛人ピエール・ド・クーベルタンの提唱によつて千八百九十四年オリンピックの復興が遂げられた。オリンピック競技を通じて、民族間の理解と國家間の友好増進を期待せんとするクーベルタンの意圖と、英本國に成長したスポーツマンシップは大融合を遂げて、光輝ある第一回大會が千八百九十六年、古代オリンピヤの由緒深い希臘の首都アゼンヌで開催された。

かくて近代化されたオリンピックは、第二回大會を更に四年後の千九百年パリで、第三回を千九百四年米國セントルイスで、第四回は千九百八年倫敦で以後何れも四年目毎に舉行され、ストツホルム、アントワープ、パリ(千九百二十四年)アムステルダム、ロサンゼルスを経て、第十一回大會は昭和十一年伯林で開かれた。この間、千九百十六年の伯林で舉行すべき第六回大會のみは、世界大戰のため中止された。

五大洲から参加 アントワープ大會以後いよく内容を充實し

同大會及びパリ大會には、世界大戰における獨逸等戰敗國の参加が拒否されたが、アムステルダム大會には、反聯合軍諸國も参加することとなり、オリンピズムの目的は完全に世界の高揚を見た。第八回大會における参加國数は四十五、代表選手二千餘名に達し、第九回大會にも参加國四十七と代表選手二千餘名が動員された。

冬季オリンピック競技 冬季競技は千九百二十四年におけるオリンピック第八回會年度から創始されその第一回は佛國のシャモニー、第二回は千九百二十八年瑞西のサンモリツク、第三回は千九百三十二年米國のレーク・ゴラシッドで舉行され、第四回冬季オリンピックは、第十一回伯林大會に併開され、千九百三十六年南獨のガルミツシュで舉行された。参加國は四十ヶ國に上り、代表選手總数は實に千五百を突破した。世界五大洲からオリンピック・ムーヴメントに参加するもの回を重ねていよく多數となり、五大洲をシンボライズする五輪の旗風は、颯爽としてスポーツ黄金時代を現出しているのである。

オリンピックと日本 スポーツ日本がオリンピックに初登場を試みたのは、ストツホルムで開催された第五回大會をも

つて嚆矢とするが、當時嘉納治五郎は自ら大日本體育協會を創立して會長となり、三島彌彦(帝大)金栗四三(東京高師)兩選手を率ゐて陸上競技に参加、金栗はマラソンに落伍し、三島も百米豫選に五着、二百米豫選に四着となつて敗退し、四百米豫選に二着で入選(準決勝は棄權)したのみで極東より初陣のわが代表選手は惨敗の血涙を絞つた。

ストツホルム大會敗殘の苦杯は黎明期における我國のオリンピック・ムーヴメントを刺激し、世界大戰後アントワープで舉行された第七回大會には陸上競技に十二名、水上競技二名、庭球二名、役員とも十八名のデレゲーションを派遣し、スポーツ日本の新興威力を示したが、陸上、水上ともに未だチャンスなく、庭球に能谷の健闘凄しくシングルに二位、ダブルにも柏尾と組んで二位を得た。次のパリ大會にはその前年關東大震災に遭遇した後であつたが、陸上八名、水上六名、庭球四名、レスリング一名の代表選手を参加せしめ、陸上では初入賞の殊勳を挙げ、水上では百米自由形に五着、千五百米自由形にも五着となり、素晴らしい進境を示したほか、レスリングにも三位となつた。

その頃より我國におけるオリンピック熱は漸く盛んとなり

アムステルダム大會には陸上において三段跳優勝、三段跳四等、マラソン四着、女子八百米二着等を獲得し、水上においても二百米平泳優勝、百米自由形三着、百米背泳四着、八百米、二百米の好成績を収め、三段跳と二百米平泳によつて、二回アムステルダムの夏空高く日章旗が翻つた。この回より冬季オリンピックにも参加し、千九百二十八年二月、瑞西サンモリツクで行はれた第二回冬季大會には、七名のスキー・チームが派遣され、銀界の國際爭覇に對し最初のシユプールを残した。

かくて、オリンピックと亞細亞スポーツ界の盟首日本との關係はいよく緊密を加へ、世界スポーツダムの絶頂と驚異となつたが、ロサンゼルス大會には太平洋を渡つて役員六十九名、代表選手百三十一名(内女子十六名)の大デレゲーションが参加した。

ロサンゼルス大會の戦績は、前回のアムステルダム大會に比して更らに光輝ある殊勳を現し、その目撃しき大飛躍はオリンピヤ史上特筆すべき業績として各國を驚嘆せしめ、更らに千九百三十六年伯林で開かれた大會には、多數の選手が参加して歴史的の成績を収め、いよくスポーツ日本の光輝を



發揮したが、閉會後關係各國代表に、千九百四十年に開催される第十三回大會の會場を協議の結果、投票によつて我東京と決定され、紀念すべき皇紀二千六百年に相當するこの年において、我國は各國選手及び關係者を迎へて、世界的大競技會を開くこととなつたのである。

### 第二節 水上競技

ウォーターポロとダイビングとを總稱して、水上競技といつてゐる。このうちの競泳は速さを競ふものであるが、これに自由型、平泳、背泳があり、これにリレーレースも含まれてゐる。ダイビングにはスプリングボード飛込と高飛込などもある。

### 第三節 陸上競技

陸上競技場のトラック（外園）とフィールド（内園）で行はれる各種競技を總稱して陸上競技といつてゐるが、是等のうち最も普通に行はれるものは、次の如き競技である。  
一 トラック競技 百米、二百米、四百米、八百米、千五百米、五千米、一萬米、マラソン、高低障害、鐵走。

ることを走壘といひ、また次打者の後援によらないで、走壘によつて次壘を陥れることを盜壘といふのである。

野球は米國から始つた競技で、我國へは明治の中期に傳はり、爾來學生のスポーツとして最も隆昌を來し、東京に於ける春秋二期の六大學リーグ戦、夏季關西に於ける全國中等



學校爭霸戰等は全國的に興味を呼んでゐる。

野球の競技場 競技場の廣さは一定しないが、少くとも三百呎平方以上であることを必要とし、其一隅に一邊の長さ九十呎の四角形を區劃し、各頂點に當る所に本壘、一壘、二壘、三壘を設ける。この四角形をダイヤモンドとも内野（インフイ

- 二 フィールド競技 圓盤投、砲丸投、鐵錘投、槍投、走幅跳、走高跳、棒高跳、三段跳。
- 三 混成競技 五種競技、十種競技。

### 第四節 各種運動競技の方法

野球 運動競技の一種で、各々九人から成る兩チームが、交互に攻撃、守備してその得點の多きを争ふものである。通常九回を以て一ゲームとし各回の得點を總計して勝敗を定め、九回で同點の場合には補回に入るのである。

攻撃の順次を打順といつて、守備のポジションには投手（ピッチャー）捕手（キャッチャー）一壘守（ファースト）二壘守（セカンド）三壘守（サード）遊撃（ショート）左翼手（レフト）中堅手（センター）右翼手（ライト）がある。このうち後の三者を外野手（アウト、フィールドャー）其他を内野手（イン、フィールドャー）と稱して居る。

得點は打者が投手の投げる球を打つて安打を放ち、或は四球、死球を得、又は敵の失策により一、二、三壘を陥れて本壘へ歸還することをホーム・インといひ、これに依つて得られるのである。既に壘に出た攻撃者を走者、走者が次壘へ走

ールド）ともいひ、これに對しその外部を外野（アウト・フィールド）といふのである。

野球用具 ボールは護謨又はコルクを心として毛糸で巻き固め牛皮若くは馬皮の外皮で包んだ硬球で、重量五オンス以上五オンス四分一、周圍九吋以上九吋四分一である。打棒は圓材

で作る長さ四十二吋以下、握る所は細く先端に至るに従つて太くなり、太い部分の直徑は二吋四分三以下である。手袋は重量十オンス以下、掌の周圍十四吋以下であるが、捕手及び一壘手のは自由となつて居る。

野球の仕方 投手の投げる球のうち、本壘の上適當の高さの所を通るものをストライク、さうでないのをボールといつてその判定は球審が行ふ。打者ボール四（四球）を得れば一壘に進み、ストライク三を得てなほ打ち得なかつた場合にはアウト（死）となるのである。

打者の打つた球のうち、本壘と一壘及び三壘とを結ぶ線内に入るものをフェアヒット、線外に出るものをファウル、ボール（邪球）といひ、又其地を備ふものを捕球、空を飛ぶものを飛球といつて居るが、飛球が地に落ちることなく壘手に捕へられた場合には、打者はアウトとなり、捕球はファウルの



場合を除くの外これを捕へて打者が一壘に達する前に、一壘に送れば打者はアウトとなる。即ち打者は四球、安打、敵の失策、死球（投手の球が打者の身体に觸れた場合）によつて一壘を獲ることになるのである。

安打には単打、二壘打、三壘打、本壘打（ホームラン）があり、二壘以後は封殺の場合の外、球を觸れられなければアウトとはならない。二人以上の選手の間によつて、一つのアウトが成立したとき、走者をアウトとした選手には刺殺、共同動作に参加した者は補殺が與へられる。一打者出壘し、又はアウトとなれば次打者が代つて攻め、既に三死に至れば攻撃の權利を失ひ、敵がこれに代るのである。

ラグビーフットボール ラグビーフットボールは、英國式の蹴球で、單にラグビー又はラ式蹴球ともいつて居る。一組十五人づゝから成る兩軍が、長邊百十碼、短邊七十五碼以内の長方形に區切られた競技場内に、一個の楕圓形の球を奪ひ合つて互ひに短邊の外側の敵陣（インゴール）へ球を運んで手を押へることによつて得點し、一定時間内の得點の多い方が勝つのである。

競技者は通常フオワード八人又は七人、ハーフバック二人

とがあるが、軟球は我國獨特のものであり、世界共通の庭球は硬球である。

競技にはシングルズ・ダブルズとミックス・ダブルズの二種がある。シングルズは一人づゝの競技で、長さ七十八呎、幅二十七呎の競技場の中央に、高さ中央三呎、兩側三呎六時の網を張つて境界とし、兩競技者は各自の區域から球をラケットで打ち合ひ、その球が區域から出て網に引つかゝつても失點となる。失點四となればそのゲームを失ひ、十ゲームを一セットとし、早く六ゲームを相手に獲られると、そのセットを失ふのである。

通常試合は五セット又は三セットマッチである。ダブルズの方は二人づゝが一組となつてする競技で、コートは長さはシングルズと同じで、幅は兩側に四呎づゝ廣くなつてゐる。またミックス、ダブルズは男女が一組となつて戦ふもので、競技方法はダブルズと同様である。

中飛 跳躍してその跳んだ距離の長さを争ふ競技である。距離は定められた踏切板の一端から競技者の踵の間を測つて決するが、踏切板の前方へ出て踏切をした場合には無効となる。槍投 槍を投げてその到達する距離の遠さを競ふ陸上競技で

又は三人、スリクオーターバック四人、フルバック一人より成り、攻撃に當つては各競技者が球を蹴り、或は持つて走り或はこれを味方に渡し、又は地上の球を足で蹴りながら進んで行くかによつて前進し、相手方がこれを防ぐためには球を持つてゐる者に限り飛びついて引倒するか、或はドリブルに對し身体を地上に倒してシェーピングするか許される。球を敵陣に着すると三點を得、更にトライを行つた點とゴールラインを結ぶ直角線上から、ゴールに向つて蹴る權利を生じ、成功すれば二點を加へる外、罰蹴又は自由蹴により三點、或は競技進行中ボールを地上に落して、バウンドした所を蹴ることにより四點を獲得することが出来る。

競技時間は前半後半とも四十分以内に適當に定め、間に五分の休憩を置き、兩軍同點のときは延長戦を行はないことになつて居る。又レフエリーに絶對權のあること並に、競技者に負傷者を生じても交代を許さないこと、天候の如何に拘らず、必ず豫定日通りに舉行されること等の特徴がある。

庭球 庭球はローンテニスと稱する球戯の一種で、約六十年前英國に起り、明治初年我國に傳來したものである。元來芝生の上で行ふためローンテニスといふので、球には硬球と軟球

ある。槍は木の柄に槍の穂先を附したもので長さ二・六米、重さ八百瓦以上あり、その重心のある位置は細紐で巻いてある。競技者はこれを肩に擔ぐやうにして走り來り、その手を一度後方に伸ばし、兩足を踏張り、腰を捻つて投げるのである。オリンピック競技の一種目となつて居り、現在の世界記録は七四・〇二米である。



走走高飛 陸上競技の

一で、設けられた横木の正面、或は競技者の好む斜の方から走り來り一方の足で踏み切ると同時に兩足を完全に地面から離し、横木を落さぬやうに跳び越えるのである。同一の高さで三回試みて越せなかつた時は、その前に跳び越した高さを記録とする。



落ちた地点と圓の内側との最短距離を測り勝敗を決するものである。この場合競技者がその圓内から足を踏み出せば失格となる。

**三級跳** 我國の特技でオリンピックで二回の連勝を得て居る。競技者は跳躍場に向つて走り來り、定められた踏切板でまづ跳躍し、踏切つた足で着陸して身體を支へ、次の跳躍では踏切と反對の足で着陸し、更に最後の跳躍を加へて砂場へ走幅飛のやうに兩足で着陸する。この三つの跳躍の距離を加へて勝敗を争ふのである。

**砲丸投** 投擲競技の一で、鉛を充填した鐵、又は眞鍮球で完全な球形をなし、重量七・二五七磅の球を投げるものである。競技は直徑二・一三五米の圓内で行ひ、投擲の際これから足を踏み出せば失格となる。

**十種競技** 競走、跳躍、投擲のうち十種目から成る混成競技で、現今國際オリンピック大會其他で行はれてゐる。種目は百米競走、走幅跳、砲丸投、走高跳、四百米競走、百十米ハードル、圓盤投、棒高跳、槍投、千五百米競走で、その各々の成績の合計によつて勝敗を定めるが、競技はこの十種目の前半と後半とを二日に分けて行ふことになつて居る。

決する競技である。オリンピック競技の規則では、圓盤は重量四ポンド半、半徑八吋、厚さ中心に於て二吋と定められて居る。

**ピンポン** 卓球とも稱する室内競技の一種で、長さ九尺、幅四尺五寸、床からの高さ二尺四寸五分の卓をコートとし、その中央を高さ五寸五分の網で區切り、競技者二人はネットを隔て、相對し、木製の打球具で互にセルロイドの球を打合つて勝敗を争ふ。球の大きさは直徑一寸二分五厘、重量五分六厘を標準として居る。



フルゴ

**ゴルフ** スコットランドでは早く第十五世紀頃から行はれた競技であるが、現在の如く規則や器具を用ひるやうになつたのは、第十九世紀の中葉からである。英米に最も盛に行はれ我國では大正の末期頃

**五種飛** 競走、跳躍及び投擲中の五種目から成る混成競技で、その起源は希臘のオリンピック競技の第十八回目である。當時は高跳、槍投、圓盤投、競走、角技の五種であつたが、現今萬國オリンピック大會其他で行はれてゐるのは、走幅跳、槍投、二百米競走、圓盤投、千五百米競走の五種目となつて居る。



跳高棒

際しては同じ高さを三回のうちに越えれば、次の高さを試みる事ができるが、續いて三回失敗したときは、前に越えた高さをその競技者の記録とすることになつて居る。

**圓盤投** 昔は石又は金屬で作つた圓形の盤を用ひたが、現今では金屬の中心を持つ木製の圓盤に鐵の縁を嵌めたものを用ひこれを投げて落下した地点までの距離の長さによつて勝敗を



スキー

其まゝ利用し、そこに十八個の孔を設ける。用具は球と棒とで競技は球を棒で打つて孔に入れ、順次に孔を追うて廻り、最少の打數で全體の孔を入れ廻つたものを勝とする。今では世界的のスポーツとなつてゐる。

**スキー** スキーを着けて雪上を滑走するスポーツで、その發生は西紀千八百年頃ノルウェーに始まつて居る。爾來オーストリアのマチアスツダルスキーにより研究せられ、アルペン、



スキージンギとして同國に發達した。これより前者をスカンジナヴィヤ・スキージンギ或はノルウェー・スキージンギと呼びジャンプ及び長距離競走に長じてゐる。後者はアルペン・スキージンギと稱せられ、専ら急峻山嶽のアルプス地帯に應用される。明治四十一年以後ハンス、コラー及び埃國少佐テオドルフオンレルヒの紹介によつて我國に傳はつたが、近年世界のスキージンギ王シユナイダーは獨自の急峻、テンポに適應した、安定確實なオールベルヒ、スキー術を編出し、現在全世界スキー界を風靡してゐる。滑走用のスキーは長さ約二米、幅七・八厘、前の木製の靴の中央を、金具と尾錠附革具で固定し、輪のついた兩杖を用ひ、裏面にワックスを塗つたものである。

マラソン競走 長距離競走の一で、オリンピック競技に於ける距離は四二、七五〇米あるが、これよりも短い距離で行はれる。西紀前四百九十年フアイデビツテス二十六哩餘を疾走してマラソンの勝報をアテネ市に齎らし、これを告げると共に死んだといふ故事から起つた競走で、現在の最高記録は二時間三十一分三十六秒となつて居る。

水泳 水中において足で水を蹴り、手で水を掻いて推進する術

で、泳法は極めて多いが何れも平體、横體、立體の三基本體形から變化したものである。我國は四面海を繞らす海國であるため、水泳術は太古から發達し、日本書紀崇神天皇の條にもその事が見えてゐる、従つて流派も非常に多いが、現今世に知られる流派は、河井流、小堀流、八幡流、神傳流、觀海流、向井流、水府流、講武永田流、孔明流、眞陰流、司馬流、笹沼流、自然流等である。明治以後スポーツの流行と共に水泳もスポーツの一科目となり、西洋流の泳法が移入せられて現今競泳には殆ど専らこれが行はれてゐる。西洋流泳法の基本型にはクロール、ストローク・プレスト、ストローク・バツク、ストロークの三種がある。水泳を基礎とした競技にウオーターポロやダイビングがあるが、近時我國に於てはスポーツ水泳の發達目覚ましく、毎會のオリンピック競技に於て名聲を轟かせてゐる。

ウオーターポロ 水上競技の一で、普通プール内において一組七名から成る兩組の間に行はれ、浮游するボールを泳いで運び、相手方のゴールに入れれば得點となるのである。

水中飛込競技 スプリングボード飛込と高飛込の二種があり、高飛込は更に高遊飛、高曲飛、高飛込混合競技に分たれて居

る。この中の高曲飛には三十九種あるが、走ると立つたまゝの、前向きと後向きと、體を横轉させるのと、海老腰になるものと、返り跳、逆立の六種の組合せである。この競技は五人の審判員によつて採點されるのである。

レスリング 西洋の相撲或は柔道ともいふべき競技で、二人の競技者が取組み、最初は立業の競技、次に寝業、最後にまた立業の競技を行ひ、審判の判定によつて勝敗を決する。但し一定の競技時間内に、相手の兩肩を同時に床の上に押へつけると勝となる。業の使ひ方の差異によつて、ギリコローマンスタイルとフリースタイルとの差別がある。

バレーボール 排球と譯する競技の一で、一組十二人又は九人づゝの兩チームがネットを境として、コート上に相對し、互に球を打つて相手のコートに觸れしめ、又は相手方を失策せしめることを競ふものである。敵の一失毎に一點を加へ、いづれか二十一點を得れば一セットを終る。通常五セット又は三セットゲームである。球を打ち始めることをサーヴといひ、サーヴ側が失策すればサーヴを相手に譲るのである。又球を打返すとき、三遍だけは味方が觸れることを得るが、三遍目には必ず打返さねばならぬ。コートは二十二米に十一

米の長方形で、ボールは周圍六十五種以上六十八種以下、重量は二百八十瓦以上三百四十瓦以下である。

バスケットボール 籃球又は籠球と譯する。團體競技の一種で五人づゝ二組に分かれ、互に味方のバスケットに球を入れてその得點を争ふ。競技中球を入れた場合は二點、フリースローの場合は一點と計算する。バスケットは鐵の輪に底のない網を附けたもので、長方形の競技場の短い方の線の中央高さ十呎の所に設ける。一ゲームの時間は四十分で、千八百九十一年米國のネイスミスが創始したものである。



ルーボトツケスバ

ホツケー 競技の一種で、縦百ヤード、横六十ヤードのグラウンド内で双方十一人づゝに別れた二組が、それ／＼長さ三呎半の先の曲つたスティックで、一つの球(重量五〇オンス)を取合ひ、敵方のゴールへ本陣前二十呎のサークル内から球を打込み合ひ、一ゴールを一點として三十五分間づゝ前、後半



二回のゲームを行つた上、得點数の多い組を勝ちとするのである。この競技は世界最古のボールゲームで、第十三世紀頃から行はれ、第十九世紀後半頃から英國を中心として頗る盛んになつたものである。



ホ ッ ケ ッ

驛傳競走 上古の交通制度に「驛傳」といふものがある。官吏が往來する場合馬匹を供給した設備で、驛は街道約三十里毎に設け、驛馬を置いて驛吏の往來及び驛鈴を持つた官人の乗用に供し、館を以てその止宿に供した。傳は各郡字に設けて傳馬

を置き、驛符を持つた者の往來の騎乗に供した。この制は孝徳天皇の朝に始まり、文武天皇の大寶令に至つて完成した。

驛傳競走はこの驛傳の制になつた一種の長距離レクリエーションで、數名の選手を以て一組とし、各組の先頭の選手各一名が、同時に出發點A地を出發し、B地に待つ自己の組の二番目の選手にバトンを渡し、その選手は競走をつゞけてC地に待つ自己の組の三番目の選手に渡す。かくの如くして幾組かの前後の選手が、最初に決勝點たる遠方の地に到着するかに依つて、各組間の勝敗を決するのである。

不許複製 國民常識百科辭典



昭和十四年一月十日印刷  
昭和十四年一月十五日發行

大賣所

東京 北隆館  
大東海堂  
星野東館  
柳原書店  
金文堂  
大阪 東田書店  
大坂屋號  
京都 東田書店  
京はらい

國民常識百科辭典

内地定價 金三圓六十錢  
外地定價 金三圓九六錢

監修者 荻原雲來  
桑田熊一  
發行者 小泉準夫  
印刷者 石川正夫  
印刷所 帝都印刷株式會社  
東京市神田區猿樂町二ノ八

發行所 テンセン社  
電話 神田二三九三番  
振替 東京五七〇二九番



書良の備必應即到代時新

版新最



進歩した人間には、最も進歩した日常知識が必要である。本書は社会知識の総合大  
學であり、亦頭腦の大デパートである。今日の非常時局に最も相應しい、現代人の  
一日も手放せぬ、便利重寶な常識讀本であり、机上寶典である。

法學士  
山下光  
太郎著

國民常識讀本

四六列上製  
三百頁函入  
定價一圓三十錢  
送料十四錢

時代は常に進歩し、社會の文化はそれに伴つて刻々と推移し、今日の嶄新も明日になれば陳腐  
となる。この驚くべき高速度の時代に、其の時代の中心から離れず、不斷の躍進を期するために  
は、刻々に推移しつゝある文化の現實を理解し、何時如何なる場合  
に臨んでも、決してマゴつかぬ用意が必要である。本書は、斯かる  
新國民としての知識の涵養に備へるため現はれたもので、政治、法  
律、經濟等々現代文化の各方面の最も新しい、最も必要な知識につ  
いて、平易簡明の文章で解説してあるから、何等豫備知識のないも  
のでも、速かに本問題の核心に入つて、現代人として最も重要な新  
知識を、充分に咀嚼し盡すことが出来る。特に本書は法學士山下先  
生の編纂されたもので、其の方式は從來の型を破つて、斷然新趣向  
を試み、何人にも讀み得られるやう振假名付にしてあるから、本書  
一卷は全く公民讀本と公民知識の二要素を具備したものであつて、  
斯くの如き便利な書は類書中に未だかつて見ざるところである。

内容

- ◆ 國家に關する常識
- ◆ 政治に關する常識
- ◆ 國防に關する常識
- ◆ 財政に關する常識
- ◆ 外交に關する常識
- ◆ 經濟に關する常識
- ◆ 法律に關する常識

三九三二田神話電社ンセンテ 田神京東 賣發店書國全  
九二〇七五東發接 二町樂猿

盤針羅の路行人

版新最

榮根譚は貴重な修養書であり又貴い教訓書である。苟も修養書を繙くものにして榮根譚を手につ  
づは、不潔な修養書で、その修養は、教訓書で、苟も修養書を繙くものにして榮根譚を手につ  
は、不潔な修養書で、その修養は、教訓書で、苟も修養書を繙くものにして榮根譚を手につ  
は、不潔な修養書で、その修養は、教訓書で、苟も修養書を繙くものにして榮根譚を手につ

全文總假名付

但紙面の都合上解説の仕方見本には振假名がついて  
てありませんが、本文には全部つけてあります。

文學博士  
荻原雲來  
先生監修

榮根譚講話

四六列上製  
四百五十頁  
定價一圓八十錢  
送料十四錢

本見方仕の説解

人生は、苦痛の連続である。幸福に見られる時代もあるものだ。(以下省略)  
人生は、苦痛の連続である。幸福に見られる時代もあるものだ。(以下省略)  
人生は、苦痛の連続である。幸福に見られる時代もあるものだ。(以下省略)  
人生は、苦痛の連続である。幸福に見られる時代もあるものだ。(以下省略)

三九三二田神話電社ンセンテ 田神京東 賣發店書國全  
九二〇七五東發接 二町樂猿



陸軍大尉 小林騏一郎著 (初版忽ち賣切)

最新版

好評如湧

# 斷末魔の支那

四六版三百四十頁  
寫真多數入  
定價一圓二十錢  
送料十四錢

蔣介石よ何處へ行く 北支にも新政府が出来た。中支にも新政府が出来た。之れが何れも排蔣親日政府である。老獪な英國は二の足を踏みかけてゐる。ソ聯は今や肅清工作の眞最中で蔣介石の思ふほど武器を送つて來ぬ。流石の蔣介石も、泣付外交で英佛ソを巧みに操つて抗日排日侮日を續けて來たが、九江も既に落ちた。かくて漢口の陥落は時の問題である。斷末魔にあへく蔣介石はこれから何處へ行く? 戦争はいよいよ是れからだ!!

## 要概次目

○支那大陸に光る豺狼の眼 ○老獪狐の如き英國 ○ソ支不侵略條約の底に流れるもの ○支那に於ける日英米の爭鬪戰 ○露骨なソ聯の抗日行爲 ○支那事變と列強の動向 ○首都を失つた蔣政權 ○日本は何故戰ふか ○支那の女性 ○支那の國民性と風俗等々百數十項

法學博士 桑田熊藏先生監修 (最新版)

# 新會社法精解

四六判上製  
五百頁  
定價二圓五十錢  
送料二十四錢

大森民事局長十年苦心の一大結晶!!

舊法の二百六十條から一躍五百條に大改正された、新會社法の法律案の起草にかゝつたのは實に昭和二年である。爾來約十ヶ年の星霜を費して漸く兩院を通過したことは、眞に國家のため欣快に堪へぬ所である。然し法律は單に成文のみでは死物である。之れを活用する人を得て、初めてその偉大なる効果が現はれるのである。

本書は桑田博士が、この雄大なる大法律を一般國民に一讀直に了解出来るやう、平易簡明に解説したものであるから、會社の重役、株券の所有者、會社に債權を有する人々はいふまでもなく、現在會社に關係のある人、之から會社に活躍せんとする人の必讀書。

## 改正の眼點

幽靈會社と惡徳重役の出現を防ぎ、會社の基礎の強化、重役の責任の確實化、株式融通の圓満化、各種株式の相互轉換及び社債と株式との轉換の途を拓き、投資の自由を擴張し、社債權者集會を認め、又會社の整理、特別清算などの制度を採用して、會社の更生と債權者の利益を保護すると共に、罰則を重視して嚴罰主義を執つたのである。

四六判百三十頁  
新商法  
附有限會社法  
價五十錢送六錢

全書發賣店 東京 神田 二丁目 電話 三五九二 三九三  
センター社 電話 三五九二 三九三

全書發賣店 東京 神田 二丁目 電話 三五九二 三九三  
センター社 電話 三五九二 三九三



農工商業従事者の常識教科書

丸山農學士・山下法學士・篠原文學士共著（最新版）

農工商家實務常識讀本

四六列上製  
五百餘頁  
定價二圓三十錢  
送料十四錢

寫真挿繪約三百餘個挿入！！

農業に従事する人には、農業の知識が必要であり、工業に従事する人には工業の知識が必要である。従つて商業に従事する人も亦同様である。本書はこの見地から、一般農工商業に従事する人々に對し、夫れ々必要な日常常識と新知識普及の目的を以て、これを第一編より第八編に分類し、何人にも一讀直ちにその急所をつかみ得るやうに解説したもので、絶對類書の追隨を許さぬ良參考書である。

第一編 農業——農業概念、穀類、蔬菜、果樹類、工藝作物、觀賞類、森林、養畜、養蠶、農産製造、最近の農村問題、拓殖農業等外數十項。

第二編 工業——工業概念、原動機、機械工業、電氣工業、交通運輸工業、土木工業、建築工業、化學工業、工業經濟等外數十項。

第三編 商業——商業概念、賣買、銀行、信託、保險、倉庫、外國貿易等外數十項。

第四編 動物——人生と動物、動物の分類、各種動物の構造、生理、生態、分布等外數十項。

第五編 植物——人生と植物、植物の分類、顯花、隱花植物、植物の構造、生理等外數十項。

第六編 礦物——人生と礦物、岩石の用途、岩石礦物、火成岩、水成岩等外數十項。

第七編 書籍——書翰の書き方より一年十二ヶ月を通じての文例等外百數十項。

第八編 法律——民法、民訴、商法、刑法、刑訴、工場法、選舉法等外百數十項。

等々現代文化の各方面に亘り、最も新しい日常知識について、平易簡明な文章で解説してあるから、何等豫備知識のないものでも、一讀直ちに要領が得られる。

三九三二田神話電 社ンセンテ 田神京東 賣發店書國全  
九二〇七五東替接 二町樂猿

最新版

文學士 篠原豊 先生著

演説式辭大觀

四六列上製  
五百六十頁  
定價一圓八十錢  
送料十四錢

何事も一に宣傳、二にも宣傳の世の中！雄辯は立身出世の最大近道である！！

徳富蘇峰 荒木大将 鳩山一郎



支那事變は何を教へてくれたか。日本は武力には勝つたが、宣傳戰に於て明白に敗北した。之は日本が宣傳下手の爲めである。昔は雄辯は銀、沈黙は金といつて黙つてゐてもエライ人物は自然と認められた。然かし今日ではどんな正しい思想感情を持つてゐても、それを表現する力がなければ、その人は一生誤解されたり、不遇で終らなくてはならぬ。故に雄辯の力は自己の眞實を吐露し、人生に最も強く生きる唯一の武器である。

目次概要

雄辯家としての諸要素  
音聲は演説の最要武器  
姿勢にも是れ丈の注意  
言語に就ては、このコツ  
立論の順序について  
文章式辭の作法  
祝賀と弔祭文の作法

祝賀 二六項  
結婚 二二項  
還曆 四項  
表彰 五項  
弔辭 九項  
軍事 一九項  
學事 一三項  
慰勞 三項

開會 八項  
會合 三五項  
政治 一一項  
經濟 四項  
教育 八項  
思想 七項  
宗教 五項  
藝術 六項  
雜術 二〇項  
(以下省略)

永井 松岡 右 賀川 豊彦



三九三二田神話電 社ンセンテ 田神京東 賣發店書國全  
九二〇七五東替接 二町樂猿







終